

# 坂東太郎

2018年1月1日 NO. 3

第23回労働大学まなぶ友の会  
全国交流集会現地実行委員会

発行責任者：三宅敏之 編集者：小田切博

## 第23回全国交流集会開催要項

開催日時 2018年5月19日(土)13時  
~20日(日)12時まで

開催会場 水上温泉 水上ホテル聚楽

参加費(案) 15,000円(1泊2食、資料代含む)



第22回県協連総会において、水上集会を成功させようと呼ぶ

## ホテル聚楽の下見を兼ねて、現地実行委員会開かれる

現地実行委員会事務局長 近藤 泰夫

ホテル聚楽の下見を兼ねて、現地実行委員会を11月3日~4日で開催しました。各県協のかかえる課題の報告を受け、各県協が参加者目標の達成に向けて取り組むことを確認しました。

群馬県協では、5月の第22回全国交流集会直前に急逝された斉藤県協会長の後任を確立し、県協指導部の一層の団結で、全国交流集会にのぞんでいます。

茨城県協では、県協指導部が、久しぶりに内原の学習会に参加し、仲間の変化した実態にまなび直しています。

山梨県協では、5月の全国交流集会の文化発表で関東ブロックとしてJマートの演劇の成功と県協指導部がリニア、反原発、9条、沖縄などの市民運動にも積極的に取り組む事で、『月刊まなぶ』拡大に結びつけています。

神奈川県協では、毎月の第一学習会と、県協運営委員会での学習、近況報告、メモ化、個人方針を討論する中から、組織的な運動につなげています。また、『月刊まなぶ』拡大リストアップから次の友の会づくりに取り組んでいます。

す。

千葉県協では、大泉事務局長逝去の後の県協集団指導体制の確立・強化が課題となっています。5月全国交流集会には3人の担い手が参加し、全国の仲間達と交流を深め、第一学習会の強化・拡大につなげていきます。

埼玉県協では、浦和地区友の会の丁寧な取り組みから「哲学研究会」を発足させました。川越乗務区友の会は人間関係のつながりの中から配本体制を確立してきました。

また、実行委員体制は専門班体制としました。各班の任務を班ごとに主体的に企画し、開催当日までのスケジュールを作成し、行動していきます。文化班は、寸劇の企画と合唱の練習日・会場確保を担当します。編集・記録班は、ニュース「坂東太郎」の発行を担当します。機動・設営班は、会場までの案内と会場内の設営を担当します。財政・物販班は、物資販売や金銭の管理を担当します。

全体会場の下見では、舞台の状況、備品、各レイアウトの確認をしました。

# ジャンプ

## 全国から水上へ ホップステップ

### 九州ブロック福岡県協

「学習・反合理化・社会主義」の基調に基づいた討論を続けています。高齢者（80歳～90歳）が5人で60代後半が10人です。健康者は5人ですから、話し合いを深めながらの学習会と諸取り組みを一步ずつ積み上げるように努力しています。

女性は高齢者で一昨年までは徳島での交流集会は参加できましたが、遠出の参加は困難になりましたので、男性の健康な人から参加するようにしています。現在3名の参加です。元気な人も、パートなどで働いていますのでお互いに支え合いながら参加できるように拡大をめざしています。三池のOBを支えながら、一緒に統一行動をめざしてがんばります。



### 四国ブロック 高知県協

一番最初に群馬・水上の地を訪れてから早12年。その時は高知から6名の参加でした。二回目は9名の参加で、これは四国から外へ出たがらない会員が多い高知にとっては、画期的と言えます。水上には高知を惹付ける何かがあります。

今回三回目となる水上開催ですが、今までの7月開催から5月開催となり休暇の問題が出てきます。また、高知からは遠い地になるため旅費の問題もあります。

そのため、参加してもらおう仲間に、旅費の積立てを意識してするように取り組みを強化していきたいと思っています。

### 東京ブロック南部県協

2017年10月8日、東京上野の歴史散策と懇親会という県読者大会を開催しました。この取組みは、散策ルートの2回の下見から地図や史跡等の説明書をつくるなど、それぞれの会員の能力が発揮された取組みでした。当日は晴天に恵まれ、会員以外の友人・知人や家族の参加もあって総勢16名の参加で懇親を深め、楽しい一日を過ごすことができました。この成功を土台に、東京南部県協は、第23回全国交流集会に向けて「もう一人の仲間とともに」を目標に、頑張ります。



### 近畿ブロック 兵庫県協

全国交流集会に向けた取組み、獲得課題について、と原稿依頼がありましたが、報告するほどのことはありませんが、現状を若干報告します。

奈良では6箇所で開催されています。京都でも学習会があります。そして、兵庫では13か所で学習会があり、4か所で労大講座を開催しています。悩みは、参加メンバーの固定による高齢化です。『月刊まなぶ』の読者はたくさんいるので、読者の学習会への参加が課題です。

